

てんとう虫 2

UC Card magazine

2014 February



特集

氷上の幻想

地球逍遙

アマゾンクルーズ

この人に聞きたい

倍賞千恵子

橋のある風景

高知 佐田沈下橋



延々とつづく熱帯雨林から昇る太陽。大アマゾンの夜明けは何度眺めても感動的だ。



アマゾン クルーズ

Amazon Cruise

秘境といつ夢幻

世界最長7000kmともいわれ、最大の流量を誇るアマゾン川。
その上流部分の一角をペルー北東部が占める。
広大な熱帯雨林の流域は動植物の宝庫。慈愛を流れる大河に、
濃密な緑の中に棲む鳥や獣たちの多様さに旅人は目をみはる。

文=高梨好夫 撮影=柳生雄式





支流の奥深くへ ボートは川面を自在に

地球
逍遙



支流に入り込んで動物の影を探す。葉の奥の動物をなんなく見つけるガイドたちに負けまいと樹上を凝視。



る。人口は40万。陸路では行けない世界最大の街といわれている。

4泊5日のアマゾン川クルーズ。

船が停泊している町ナウタまでは空港からバスで移動。桟橋に着くと暗い川面に今夜からともにアマゾン川を旅するアクア号が明かりを灯して浮かんでいた。アマゾン川はイキトスの上流で二つの大好きな支流に分かれる。一本は

アンデス山脈北部に水源をもつマラニヨン川、そして山脈南部に端を発するウカヤリ川。マラニヨン川に面したナウタの桟橋を離れたアクア号は川を下り、夜の間に合流点からウカヤリ川に入った。

翌朝、カーテンの間からかすかな光がもれている。大きく開けてみると浮かんだ雲が赤く染まっていた。大アマゾンの夜明けだ。赤い雲の下に黒く広がる熱帯雨林。密生した森は、日が高くなるにつれ濃い緑に変わっていった。水の色は黄褐色。透明度はほとんどない。泥を多く含んでいるようだ。

ペルーの首都リマから空路で北東に2時間。アンデス山脈を越えて到着したイキトスはアマゾン河口から3700キロメートル。かつてはゴム産業で栄え、現在はアマゾン川上流の物流の拠点となっている。かかると水の色が黒っぽい。ウカ

船が岸に寄り、舷の綱が立木に縛りつけられた。乗客は3艘のボートに分乗。支流に入り込みそこに棲む動物たちを観察するため。支流の入り口にボートがさし



曲がりくねった川をスピードを上げて疾走。爽快な気分。



ポートは水草の中にまで。水鳥の姿が間近に。



ヤリ川の黄褐色とはつきりした境目をつくっている。スクリューが巻き上げる水は薄いコーヒー色。川底に堆積した落ち葉や流木から滲み出るタンニンの色という。このような水をブラック・ウォーターと呼んでいる。その水面は鏡のよう。岸辺の木々も雲も空もきれいに映しだしている。不思議な光景だ。

蛇行を繰り返す川をスピードで走る。南緯5度。熱帯の日差しは強いが、頬に当たる風

は心地いい。速度が落ちた。ガイドがなにか見つけたらしい。指さすほう見ると枝の中に黒い影。「ナマケモノ」と日本語で教えてくれる。世界一動きが遅いといわれるナマケモノ。枝からぶら下がつて動かない。

3艘は、後になり先になり川面を行く。突然、止まる。「モンキー」とガイド。よく見ると高い木の股に小さな猿が3匹寄り添っている。子どものようだ。愛くるしい姿に思わず頬がゆるむ。



流れに沿つてボートがカーブすると、岸辺に生い茂る緑の中に点々と白い鳥が止まっている。水草の上にもたくさん。すごい数だ。白い体に黄色い嘴。体高は50センチほど。日本でも水辺で見かけるサギの仲間だ。エンジンの音に驚いたか一斉に飛び立つた。群れはいくつも。ボートの進行方向に飛び立つ群れもいれば反対方向へ向かう群れも。青い空、緑の木々を背景に羽ばたく白い体が鮮やかだ。これがアマゾン川のかと、その光景に目を奪われる。

サギの群れに遅れて黒い鳥の一群も飛び立つた。黒い体からウの仲間と推察できる。群れはすぐに鉤形の編隊を組んで川面近くを低く飛び去つていった。ボートがスピードを落とすたびに緑の中から鳥たちの囁りが聞こえてくる。アマゾン川流域には

1800種もの鳥類が生息しているという。まさに野鳥の宝庫。

樹上の動物を見つけようと岸边に目をこらす。白い幹の木の、根元から2尺ほどまでが黒ずんでる。雨季の増水時の水位の痕跡という。見渡す限り平坦に近い流域。その水量は想像もできないが、そもそもアマゾン川は世界の河川の流量の20%を占めるという。

イグアナと言う声が聞こえた。木の枝に体長1尺ほどの緑色のイグアナがしがみついている。泳ぎがうまく、ふだんは木の上で生活しているが危険を感じると川に飛び込んで逃げるとか。それでも速度を上げて走るボートの上から樹上の動物を見つけるガイドたちの目の良さに感心してしまう。ほとんど枝の中に隠れているというのに。

川幅が広くなつた。湖のようだ。水面に波紋が広がつた。そして三角形の背びれ。ハイイロカワイルカだ。アマゾン川といえばピンクイルカが有名だ。その出現を待つたが、なかなか現れてはくれない。ピンクイルカを目撃する楽しみは、次の機会にとつておこう。

これぞアマゾン！ 鳥たちの乱舞に酔う



おびただしい数のサギが水面を舞う。ここでは人間は鳥たちの楽園への闖入者だ。

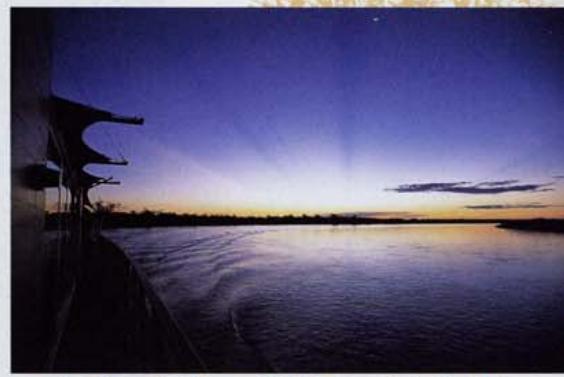


アマゾン川の5つ星ホテル 小さく贅沢なアクア号

アクア号で2晩を過ごして、この全長約40㍍、全幅7・3㍍の船がアマゾン川の5つ星ホテルと評されていることに納得する。1階と2階に配置された部屋は計12室。8室のスイートの広さは21平方㍍。十分なスペースを確保している。それに加え、窓の大きさに驚かされた。壁一面に近いパノラマ・ウインドウ。乗船してはじめて迎えたアマゾン川の夜明けの光景が、まだ目に残っている。大きな窓から壮大な未踏の曙を体感できた。やや広いマスター・スイートは4室。1、2階の船首

側にあり前方の窓から船の行く手を眺めることができる。

3階のバー・ラウンジは乗客が集う場所。翌日のアクティビティの説明などはここで行われる。乗客はビールやワイン、カクテルのグラスを手になごやか。その日にガイドが撮った動物の写真がスクリーンに映し出され、生態のレクチャーも。乗客は充実した一日を追体験する。カウンターの脇にはその日の予定が記されたボードが置かれ、英語が苦手でもスケジュールを把握できる。ラウンジの前にはサンデッキ。アクティビ



アマゾン川の一日が終わる。満ち足りた一日を噛みしめる時。



上／落ち着いたインテリアが高級感を演出しているダイニング・ルーム。下／ラウンジにはアマゾン川流域で見られる動植物に関する書籍が充実している。



上／ディナーでのメインは魚介と肉の2種が供される。右／停泊は立木に係留して。下／ベッドの上からでも移りゆくアマゾン川の風景を堪能できる。



3階のデッキでランチを楽しむ。至福のひと時。

ティから戻つてからのひと時、やさしい川風の中でくつろげる。

乗客定員24人にクルーはナチュラル・ガイドを含めて21名。乗客の健康をサポートする看護師も乗船している。乗客に対するクルーの比率が高いことは安心につながる。小さなながらもブティックがある。帽子、長袖Tシャツなど熱帯の光から身を守るために必要なものがそろっている。バド・ウォッチングでの必需品、双眼鏡も貸し出している。

ダイニング・ルームは2階の後方。三方が窓で緑の森、大河の流れを眺めつつ料理を味わえる。ここで供される料理のすべてをプロデュースするのはリマの高級レストランのシェフ。ジャンブルでとれた新鮮な果物、食材をつかつた料理が特長だ。フレンチ、イタリアンなどの調理法を加えた料理は船上で味わっているとは思えないほどの出来栄え。朝、昼のビュッフェの充実ぶりにも満足させられた。食事時のビールとハウスワインは旅行代金に含まれているというのもうれしい。

残りの2泊、5つ星の贅沢を心ゆくまで味わってみるつもり。

これを眺めつつ料理を味わえる。ここで供される料理のすべてをプロデュースするのはリマの高級レストランのシェフ。ジャンブルでとれた新鮮な果物、食材をつかつた料理が特長だ。フレンチ、イタリアンなどの調理法を加えた料理は船上で味わっているとは思えないほどの出来栄え。朝、昼のビュッフェの充実ぶりにも満足させられた。食事時のビールとハウスワインは旅行代金に含まれているといいうのもうれしい。



上右／アナコンダに遭遇するのは珍しい。上左／ジャングル・ウォークで見かけた蟻の巣。下右／魚を捕えて飛び立つワシの仲間。下左／現地の人々が足代わりに使っているボートを湖で漕げたのも貴重な体験となった。



上左から／ここまできたら湖でのスイミングも試してみたい。意外とおとなしかったカaiman。ハヤブサの仲間のカラカラ。猿の子どもたち。こちらを見ている。ゆっくりと動くナマケモノ。サギが漁に成功。悠然と滑空する姿に見とれてしまう。



アナコンダとカaimanとピラニア
アマゾン川を体感

今日のアウテイニアテイの樂

はピラニア釣り。3艘のボートで支流に入ると、今日もさまざまな鳥たちが迎えてくれた。そのつどカメラ、双眼鏡を向ける。ガイドの無線機に連絡が入った。ほかのボートが何かを見つけたらしく、その現場に急行すると体長1・5メートルほどのヘビ。アナコンダ

のベビーという。成長すると10歳近くにもなるという、あれ?人を呑み込んだ映画のシーンが頭をよぎる。近くに親はないのか……おそるおそる見回してしまった。

昨日はナイトツアーアーがあつた。
夜行性の動物を見るため夕刻に
出発。闇が迫る空には小鳥が飛
び、ホエザルの声が耳に届く。ガ

イドはサーチライトを振つて両岸に光を投げかける。手を上げて合図した。ボートがエンジンを止めて岸に近づくとガイドがジャンプ。何かを押された。その両手で持ち上げたのは80センチほどのカイマンの子ども。写真を撮つて川に放された。光を当てるときが光るので見つけやすいとか。

ボートが釣り場に着いた。高い木の影が水面を覆つている。木の枝の竿に大きな鉤。鉤と鎌の間はワイヤーだ。餌は生の鶏肉。教えられた通りに竿先で水

面をたたきピラニアの気を引く。仕掛けを落とすとすぐに餌が横に動いた。いる。アタリがあつて竿を上げると餌がない。やられた、お見事。喰い千切られないように餌の付け方をえてみた。すぐに小さなアタリ。さあ、鉤ごとかぶりつけ：竿先が水面にもぐるほどのアタリ！はじめて釣りあげたピラニア、鉤がしつかり上顎にかかっている。鋭い歯がのぞいている。不測の事態を避けるためガイドが鉤をはずしてリリー



上から／ビラニアを釣りあげて満面の笑み。ビラニアは鋭い歯で餌を噛み千切る。蝶も鮮やかな色で緑の中を舞う。熱帯雨林の濃密な空気は忘れない。



西の空にオレンジ色が映える

時刻にアクア号が係留される
るウカヤリ川に戻ってきた。3艘
のボートが横に並べられ、ロープ
で固定された。ボートのエンジン
がすべて止められると川面は静
寂そのもの。ボートは流れのまま
にゆつくりと下流へ。アマゾンの
川旅が終わろうとしている。明日
はイキトス。そして帰国だ。寂

流れるままに 夕日に捧げるカクテル

あなたも、至福の原始の旅人になりませんか。

詳しくは次頁を。

感と達成感も表れている。

シャンパン・カクテルが全員に
配られた。ペルー式で乾杯しま
しょうとガイドが提案。掛け声
に合わせてグラスを上下させる。

アリーバ！（上へ！）

アホバ！（下へ！）

ア・セントロ！（真中へ）

イ・ア・デントロ！（そして体の中
へ）

かかげたグラスに夕日が輝く。
お代りが注がれた。その一杯は大
河アマゾンの夢幻のなかで。

地球
逍遙

ポート同士をつないでいたロープが解かれても名残惜しく夕日をみつめた。

